

山伏の絵師 ^{よこいきんこく}横井金谷が描いた

^{ばくふず}「瀑布図」(草津市蔵・中神コレクション)

「近江蕪村(おうみぶそん)」と称される横井金谷は宝暦11年(1761)栗太郡下笠村(くりたぐんしもがさむら)(現：草津市下笠町)に生まれました。本職は浄土宗の僧侶であり、京都の北野にあった金谷山極楽寺(きんこうさんごくらくじ)で住職となりました。この山号「金谷山」から雅号「金谷」が名付けられています。その後、天明8年(1788)に起こった京都大火で極楽寺も類焼します。金谷はこれを機に、城崎(兵庫県)での湯治に出て、続いて、瀬戸内地方から、はるばる長崎、天草(熊本県)までを訪れました。法善寺(大阪府)に逗留した時、仏画を手がけたのが絵を描くきっかけとなったと自伝「金谷上人御一代記(きんこくしょうにんおいちだいぎ)」で語っています。「金谷上人御一代記」には突飛で滑稽な記述も多く、そのすべてが事実かは明らかではありません。しかし、金谷の前半生は「旅する奇僧」として生きたといえるでしょう。

文人画を描き始めたのは放浪の旅をしながらも名古屋に留まった30代後半頃からのようで、近江出身の南画家・張月樵(ちょうげっしょう)に教えを受け、与謝蕪村(よさぶそん)の風景画を模写したのが始まりです。

その後、文化6年(1809)修験道の道に入り大峰山(おおみねさん)で山伏として修行をしています。霊山での荒行や自分の籠った深山での経験は金谷の芸術に深い影響をおよぼしました。放浪のうちに生涯のほとんどを送り、修験者であった金谷の自然を描いた風景画は力強く、与謝蕪村とは違った金谷の山水画の世界感があります。その霊山巡拝の経験は、中国を模した険しい山よりもはるかに大らかな型にはまらない筆遣いに変様させました。



本図は、12か月の風景を描く揃物の中の一冊で、6月の風景を描いています。緑の山塊より流れ落ちる瀑布が生み出す涼しげな風景は自由奔放な筆致で描かれています。その前で宴を催す人々もどことなく楽しげで自然を敬う気持ちが伝わってくるようです。

(令和7年6月・草津宿街道交流館 吉崎 早苗)